# 幼稚園教育での幼児の遊びにおける「表現」の育ちに関する研究

## ―ごっこ遊びにおける幼児の表現と社会認識の芽生えに関する一考察―

清 水 百 合 香

## 1　はじめに

現代は、都市化、少子化、機械化が進む中で、人と人との人間関係の稀薄化やコミュニケーション力の低下が指摘されている。また核家族化の広がりなどにより、家庭の教育力の低下・社会の中における規範意識の低下などが問題として表れてきている。そのような問題・課題が広がっている現代である故に、今後の未来社会を担う子どもたちの教育は大変に重要である。そしてその教育は、人格形成の基礎が築かれる幼児期から始めていく必要がある。変化の大きな社会の中でも、強く、たくましく生きていく力を幼児期にしっかりと育てていきたい。そしてそれは、幼稚園教育における役割でもある。幼稚園教育では、平成29年改訂の新幼稚園教育要領においても、「生きる力の基礎」を育てることの重要性が示されている。人間の人格の基礎が築かれる重要な幼児期に、生活や遊びの中で、幼児が多くのことを学び、健やかに成長を刻んでいけるように、幼児の遊びや生活をより充実させていくことが求められている。

## 2　研究目的

平成29年３月に改訂となった幼稚園教育要領においては、幼稚園教育の基本である「環境を通して行う教育」の考え方は変わっていないが、新たに、幼稚園教育において、幼児期に「生きる力の基礎」を育てるために育みたい資質・能力として、次の３点が示された。「知識及び技能の基礎」「思考力・判断力・表現力等の基礎」「学びに向かう力・人間性等」である。その中の一つに「思考力・判断力・表現力等の基礎」があるが、幼児が物事をどのようにとらえているか、考えていくかなどという「思考力」の面の育ちと、幼児が生活の中で、人や物・出来事に対してどのような考えや思いをもち、どのように対応していくかということにおいては幼児の「判断力」の育ちが求められる。そして「表現力」は、幼児の思考力や判断力が発揮され、人に伝わっていくためにも必要な力である。また幼児が人間として生きていく上で、相手や様々な人に対しての思いをどう表現するか、伝えていくかという

点では、コミュニケーション能力の育ちにもつながっていく。コミュニケーション力が低下している現代において、子どもたちに、表現力を育てることは、重要なことである。平田（2015）は、幼児期に表現する力を育てることの重要性を強調し、さらに、「表現とは、『感じて』、『考えて』、『行動する』ことです」と示している。そして物事に対して、イメージや考えをもったり、想像したりした時、どのように表現していくのかなど、「想像力」や「創造力」などの育ちにも大きく関係してくると考えられる。

新幼稚園教育要領においても、小学校教育へのスムーズな移行や連続した学びが大切であることが示されているが、小学校以上の学びにおける授業の中においても、国語や社会、理科や道徳などの授業では、感じたこと・学んだことを表現する力がどうしても必要となってくる。

幼稚園教育においては、保育内容の中に領域「表現」が示されており、「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする」ということが目標として示されている。幼児は、幼稚園生活や遊びの中で、自分の思い・考え・気づいたことや感じたこと・イメージしたこと・理解・認識したことなどを表現していく。表現の方法としては、大人や動物などの言葉や動きを模倣したり、考えたものを作ったり、歌ったり、友達や教師と伝え合ったり、演じたりするなど様々な表現の仕方を園生活の中で培っていく。

その中で「表現の育ち」ということを考えた時、表現方法の広がりや深まりということがある。例えば何か見た事や体験したことを模倣して表現する段階から自分なりに考えたことや創造したものを表現していくようになることなどは、表現方法の広がりや深まりなどの育ちであるとも考えられる。また人や物に対しての表現の仕方の変化などを考えた時には、自己中心的な表現から、社会性の育ちを通して、他者を意識しての表現へと変わっていくということも幼児の表現の育ちであると考えられる。砂上（2015）は、幼児の表現する力が育つ過程と幼児の生活の中での学びについて、「対象とのかかわり方の変化が、子どもが表現者として育つ過程に重なっている」と示している。であるならば、幼児期における表現の成長の過程においては、他者を意識した社会性の育ちというものも関連してくるといえる。幼児は生活の中で、身の回りのことや社会における様々な物についての理解を深め、人や物の役割・仕組みなどを認識していく。幼稚園での生活や遊びの中においても、幼児が社会認識を深め、社会性を培いながら、自己発揮・自己表現していけるような体験を重ねていくことが大切である。

幼児期の社会性・社会認識の発達について、先行研究では、日下他（1991）の研究がある。その中で、幼児が自分や周囲の人々、そして自分を取り巻く世界をどのように認識しているか、ということについて、自己認識・他者認識・外界認識というとらえ方があるということが示されている。そして外界認識の中に自然認識と社会認識があるが、社会認識に関する研究が少ないということから、日下等は、幼児期の社会認識の発達について、自由面接法を用いて調査を行った結果、４歳児～５歳児においても、社会の部分的なことを認識しているということが明らかになっ

た。

では幼稚園における幼児の遊びの中においては、どうであろうか。著者は、幼稚園における遊びの中においても幼児の社会性や社会認識の芽が培われていると考えた。幼児が遊びの中で表現する具体的な行動の中から、そのような社会認識の芽生えについて明らかにしていきたい。

そこで幼稚園生活における遊びの姿の中でも、幼児が自発的に遊び始め、表現して遊ぶ「ごっこ遊び」に着目した。ごっこ遊びは、幼児が興味、関心をもったことや、見たこと、経験したことなどを模倣したり、その役のつもりになって表現していく遊びであり、実際の体験をともなうものである。また幼児が遊びの中で自ら考えたことや理解したこと、認識したことを行動として表現し、体験しながら多くのことを学んでいく。そのように、幼児は、ごっこ遊びの表現の中で、気持ちや考えを始め、理解したことや、認識したことなども表現していく。これらのことを踏まえ、幼児の社会認識の芽生えという姿もごっこ遊びの姿の中でとらえていくことができると考えた。

よって本研究では、幼稚園教育における幼児の「表現」の育ちについて、園生活における幼児のごっこ遊びの姿から、表現の育ち・幼児の社会認識の芽生えについて、明らかにしていくことにした。

## 3　研究方法

⑴　研究テーマにおける内容をとらえる
　①「ごっこ遊び」における幼児の表現
　②　幼児の「表現」と「表現の育ち」
　③「幼児の社会認識」に関するとらえ
⑵　保育観察記録における幼児の「表現」の育ちと「社会認識」について分析・考察における観点
⑶　保育観察と保育観察記録の中の事例における幼児の「表現」の育ちと「社会認識」についての分析・考察
　①　保育観察
　　○　保育観察を行った幼稚園―都内の公立幼稚園
　　○　保育観察の時期・期間―平成30年６月下旬～９月下旬
　　○　対象学年・　４歳児クラス（５歳になってきている幼児たち）19名
　　○　保育観察における方法―自然観察法
　　５か月間の幼児の表現・社会認識の育ち・変化・変容などもとらえていけるように、一人の対象児を中心に「ごっこ遊び」を追いながら、自然観察法を用いて行う。
　②　保育観察記録の中の事例における幼児の「表現」の育ちと「社会認識」についての分析・考察
⑷　事例における幼児の表現と社会認識についての内容・分析

## 4　研究内容

### ⑴　研究テーマにおける内容についてとらえる

①「ごっこ遊び」における幼児の表現

ごっこ遊びは、幼児が自発的に始める模倣遊びである。遊びを進めようとする幼児は、自主的に行動している。幼児が自主的に始める遊びであることから、身近な人・物などついて興味・関心のあることをやってみたいという思いからの表現であると考える。とともに幼児が自ら考えたことや理解したこと、認識したことを行動として表現している姿であると考える。そして興味のあることや憧れた人・物などを模倣している段階では、その役のつもりになって表現したりして遊ぶ。そのため言葉や動きを模倣して表現しながら、自分でその内容について考えたり、想像したりして遊んでいく。そのような体験の中で、言葉を覚えたり、体の感覚や運動能力を身につけていくこともある。また周囲の大人や社会の中で人々などの動きを真似ながら、人に対する意識や、様々な人へのかかわり方なども学んでいると考える。また模倣の段階から、自分で想像したことを表現したり、自分なりの考えを含め、創造力を働かせて表現したりしていくようなこともある。このように幼児が楽しいと感じて自ら表現して遊んでいく経験が、幼児の自信となり、自主性・主体性の育ちにもつながっていくと考える。そして幼児が生活の中での身近なことや社会における人や物・出来事などを表現していく中では、生活・社会に関する内容、つまり社会認識に関する内容も多く含まれていると考える。

②　幼児の「表現」と「表現の育ち」

幼児の「表現」については、表現する内容や、表現の方法、人を対象とした表現などがあり、次のような内容がとらえられる。

○　幼児が表現する内容

幼児が表現する内容としては、自分の内面、興味、欲求、気持ち、思い、考え、気づき、感じたこと、イメージしたこと、理解・認識したことなどである。

○　表現の方法

幼児が表現する内容としては、言葉や動きでの表現、他の人間や動物などの動きや言葉を模倣するという表現、書く、作る、使う、工夫する、歌う、楽器をならす、友達や保育者と伝え合う、演じるなどの様々な表現方法がある。

○　人を対象とした表現

人を対象とした表現では、相手を意識しての表現、相手に伝えたいための表現、異年齢に対しての表現などがあり、その内容としては、喜びや悲しみ、怒り、楽しさ、思いやる気持ちなど様々な思いを表現していく。

次に、幼児の「表現の育ち」については、「表現方法の変容」「表現意識・表現

内容の変容」ということが考えられる。

○　表現方法の変容

表現方法の変容としては、幼児自身が見たこと、経験したことを模倣し表現する段階、自分なりの考えやイメージしたことを表現する段階、自分で想像したり、創造したりしたことを表現していく段階などがあると考える。そしてそれらの各段階において、表現方法が変容したり、広がったりしていくことや、表現方法が豊かさになったりして、いくことなどが「表現の育ち」となっていくと考える。

○　表現意識・表現内容の変容

幼児が表現している時の意識や表現する内容の変容としては、例えば、自分の思いだけを中心とした表現や、感じたことなどを自然に表現していく段階から、人や物・周囲を意識しての表現へと変容していくことなどが考えられる。さらに表現じたいを意識して演じる表現へと変容していくことなどがある。このような表現意識や表現内容の変容が、幼児の「表現の育ち」の姿にもつながっていくと考える。

③「幼児の社会認識」に関するとらえ

幼児のごっこ遊びにおける「社会認識」についての内容としては、社会における事象・しくみなどの認識、物や人の役割についての認識、物やしくみについての認識、社会における人とのかかわり・社会性、社会のルール・規範意識、道徳性などへの理解など様々な内容がある。幼児が、遊びの中で、それらを表現して遊ぶ時に、それらの内容が、友達や教師からも共感を受けたり、認めてもらったりしていくことで、幼児は社会認識を深めていくことになる。一方で表現した内容が、友達や教師からも批判を受けるなどしていく場合もある。そのような遊びにおけるかかわりや周囲からの反応などを受けて、幼児は社会認識を深めたり、間違ったとらえや善悪を正されたりしていく。このようなことも、幼稚園生活における幼児の学びとなっていくと考える。

⑵　保育観察記録における幼児の「表現」の育ちと「社会認識」についての分析・考察については、３つの観点からとらえることとした。

○　幼稚園教育における幼児の「表現」における観点

○　幼児の「社会認識」における育ちの観点

○　環境・教師の援助における観点

①　幼稚園教育における幼児の「表現」における観点

幼稚園生活における遊びの中で「表現」についての育ちをとらえるということでは、幼稚園教育の保育内容・領域「表現」の内容を基とした。幼稚園における保育内容・領域「表現」の「ねらい」と「内容」については、幼稚園教育要領に(平成29年度告示)、以下のように示されている。

■ 表現「ねらい」

○　いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ。

○　感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。
○　生活の中で、イメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。

■「内容」

○　生活の中で様々な音、形、色、手触り、動きなどに気づいたり、感じたりなどして楽しむ。
○　生活の中で、美しいものや心を、動かす出来事に触れ、イメージを豊かにする。
○　様々な出来事の中で、感動したことを伝え合う楽しさを味わう。
○　感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりなどする。
○　いろいろな素材に親しみ、工夫して遊ぶ。
○　音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう。
○　かいたり、つくったりすることを楽しみ、遊びに使ったり、飾ったりなどする。
○　自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて、遊んだりするなどの楽しさを味わう。

である。上記のような、幼稚園教育要領の保育内容「表現」の内容から、幼稚園生活における幼児の「表現」に関するとらえは、音楽表現や絵画表現だけでなく、幼児が自分の思いや、頭に描いたイメージを言葉や動きで表現したり、イメージしたものを製作したり、音を感じたり、自然などに対して感動を表現したりなど、様々な表現をとらえることを意味している。

②　幼児の「社会認識」における育ちの観点

社会認識ということでは、幼児が、身の回りのものや社会における物や事象に関する名前やしくみ、その物の扱われ方などについても理解し、認識しているかどうか、その育ちをとらえていくことが必要となる。

先行研究における日下等（1991）の研究では、自由対話法という方法をとり、幼児との対話の中で、幼児の社会認識について、社会認識についての育ちを明らかにしていったが、本研究では、方法として、幼児が自主的に遊び始める「ごっこ遊び」において社会認識の育ちをとらえていくこととした。それは、幼児は、理解したことを動きや言葉でも表現していくと考えたからである。そして、その表現の内容が、実際の社会における物や事象・しくみなどと合っているか否かということで、社会認識についての理解の度合いもとらえていく必要がある。

先行研究における日下等（1991）の研究では、幼児期の子どもの社会認識を３つの水準として次のように示している。

水準Ⅰ―現象そのものさえもまだ理解されていない。
水準Ⅱ―個々の現象は理解されているが、それらの背後にある関係やつながりはまだ理解されていない。
水準Ⅲ―社会事象の大まかな関係、またはつながり（またはその一部）を理解

している。

この日下等の研究で示された、幼児の社会認識の理解の仕方を追及する方法としての社会認識に関するとらえが、適切なものと思われるので、本研究においてもこうした考え方を用いたいと考えた。そして「幼児の社会認識における芽生え」についての内容として日下等が示した水準のⅡとⅢの内容を参考に、考察を深めていくこととした。

③　環境・教師の援助における観点

幼児は幼稚園生活における遊びの中で、様々なことを体験し、様々な人とかかわりながら、多くのことを学んでいく。幼稚園教育の基本は「環境を通して行う教育」の考え方である。幼児が自ら興味をもった遊びや環境に働きかけ、積極的に遊びに取り組み、充実感や満足感が得られるようにしていくことが大切である。それらを踏まえ、幼児の遊びにおける教師の役割としては、○幼児が自ら興味をもって、遊具や用具、素材に関わっていくことができるように、遊具や用具・素材の種類、配置等について考え、環境を提示・構成していく役割、○幼児の遊びを理解し、共鳴、共感していく共同作業者としての役割、○遊び方や物事の価値や善悪を示すモデルとしての役割、○幼児の遊びへの取り組みや育ちを促す援助者としての役割、○幼児が精神的に安定するためのよりどころとしての役割、などがある。このような観点から、環境・教師の援助について、観察記録を分析・考察していくこととした。

### ⑶　保育観察記録における幼児の「表現」の育ちと「社会認識」についての分析・考察

保育観察における事例においては、各時期の「ごっこ遊び」の幼児の取り組みの様子について、遊びの動きの変化ごとに番号を示した。事例における分析・考察については、○幼児の表現の育ちの観点　○幼児の社会認識における観点　○環境・教師の援助における観点　の３つの観点に分けて示し、遊びの取り組みの姿の番号と対応させて示した。

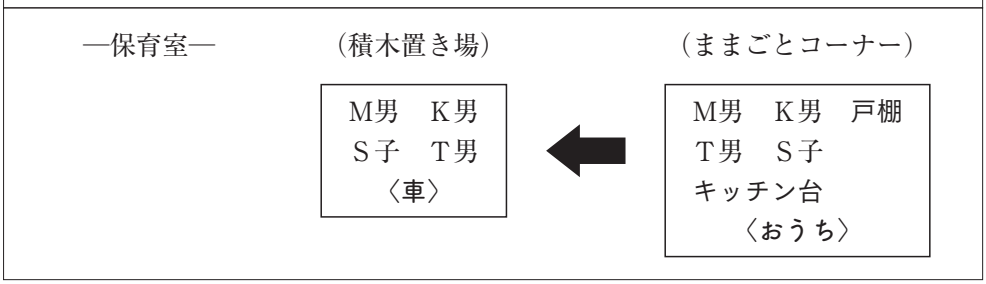
**事例１**　「生活の中で、見た経験を模倣したり、イメージした物を身近な遊具で、表現したりして遊んだ事例」

| |
|---|
| ◆　６月27日（水）　晴れ　９：10～10：15　　―保育室―<br>〈おうちごっこ・車作りごっこ〉 |
| ①　ままごとコーナーでＫ男が始めたおうちごっこに、Ｍ男が加わり、Ｋ男は父さん役、Ｍ男はお兄さん役になって遊び始めた。Ｍ男とＫ男は棚からブラシなどが入っている箱を持って来て、「おしゃれしよう」と言って笑いながら、それぞれ自分の髪をとかして遊んでいた。<br>②　Ｋ男は、キッチンのところで、料理を作り、Ｍ男は「行ってきまーす」といって出かけたりする。ままごとコーナーに近づいてきたＳ子とＴ男を |

Ｍ男が遊びに誘って、Ｓ子とＴ男も加わり、ネコの役になる。Ｍ男がＴ男に「ねこだから、靴下はいてないよね」と伝えると、Ｔ男は靴下を脱いで上履きに入れる。Ｍ男は、「ねこちゃん、ごはんだよ」と言って、Ｔ男にごはんを出してあげたりする。

③　しばらくして、Ｍ男がＫ男たち３人に向かって、「車で出かけたいね。」と声をかける。３人も「うん」と答え、Ｍ男がＴ男に「車、作ろうよ！」と誘って、積木を運んできて、ままごとコーナーの横に車を作り始める。Ｍ男は積み木を２段にして高くしていき、積木置き場の近くに置いてあった、紙とガムテープでできているハンドルを持ってきて車の前方に置く。

④　Ｍ男がハンドルを握りながらＫ男たち３人に「出発しますよー」と声をかけるとＫ男、Ｓ子、Ｔ男の３人も積木の車の上に乗る。教師が近づき「お出かけ？　いいですねー」とＭ男たちに声をかけると、４人は嬉しそうに笑う。しばらくしてＭ男が「バーベキュー場に着きました」、「おうちの皆さん、ちょっとおやつを買ってきます！」と車からおりて、保育室の製作コーナーの方へ行く。Ｍ男は、空き箱を見つけて持って来て、「お菓子買ってきたよー」とお菓子の箱を３人に見せながら、また車に乗る。




〈幼児の表現の育ちの観点からの考察〉

①　ままごとコーナー場で、K男は父親、M男は兄というつもりで遊び始め、K男もM男も「おしゃれ」と言って髪を整えるという表現をしながら顔を見合わせて微笑み、楽しさを共感している姿が見られた。

②　K男は父として料理を作ること、M男は兄として外に出かけたり、ネコの幼児に餌をあげたりすること、T男たちは、ごちそうを食べるなど、それぞれの役の表現を楽しんでいたと思われる。

③④　M男は、車で出かけたい、車を作りたい、という思いを一緒に遊んでいる友達に伝えたり、出発する時にも友達に声をかけ、おやつを買いに行って家族にあげようとしたりするなど、気持ちを言葉や動きで表現していた。友達もそれを受け止めながら、一緒に遊びを進める姿が見られた。またM男とT男は、車をイメージしながら、積木で車を作っていったが、一緒に作ることを楽しんでいた。

〈幼児の表現の中に見られた社会認識の観点からの考察〉

①　K男は父親、M男は兄役、そして２人は家族の一員という認識をもっており、

K男とM男は「おしゃれ」ということを、髪を整えるという認識で表現していた。

② K男は父として料理を作ること、M男は兄として、いろいろ出かけたり、ネコに餌をあげたりするという認識をもって表現していた。またM男は、ネコは靴下を履いていないという認識をもち言葉に出していた。

③ M男は車の大まかなつくりを認識しており、ハンドルの位置や、乗る口の位置、車体を少し高くするなど実際の車つくりの認識をもとに、車を作ろうとしていたと思われる。

〈環境・教師の援助の観点からの分析・考察〉

①～④ ままごとコーナーの中には、ヘヤーブラシが入っている箱や料理の素材が置いてあり、ままごとコーナーのすぐ近くに積木置き場があって、紙でできたハンドルなども置いてあった。それらの遊具や素材を使いながら、M男たちはおうちごっこの遊びの中で、自分のやりたい役のつもりになって遊ぶことを楽しんだり、車作りや、車で出かけたいという思いが実現でき、友達と遊びを楽しく進めていくことができたのだと思われる。

④ 教師は、M男たちが車で出かける時には声をかけているが、M男たちも自分たちの考えを受け止めてもらうことで、表現する楽しさがより高まったと思われる。

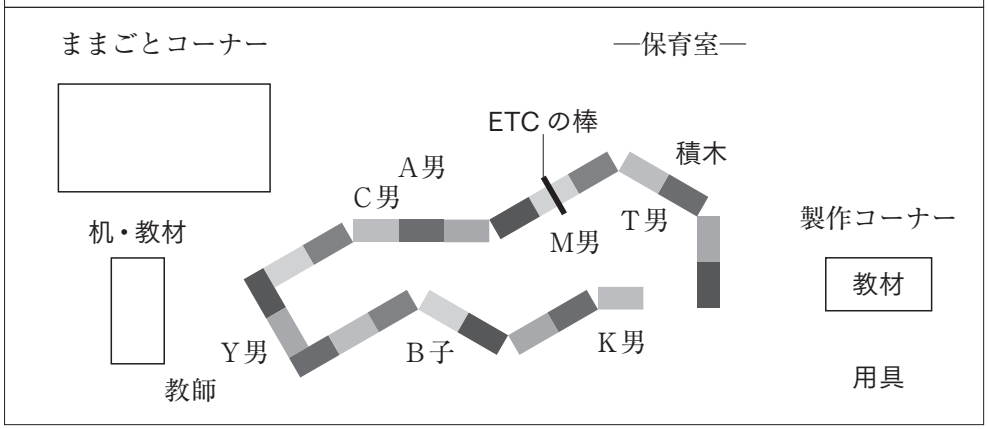
**事例２**　「経験からのイメージを頭に描きながら、つくったり工夫したりして遊びを展開している事例」

◆ ７月４日（水）　晴れ　10：30～11：30　　―保育室―
〈車製作・車ごっこ・高速道路作り〉

① 保育室の机のところで、４人の幼児が、牛乳パックにペットボトルの蓋をタイヤにしてつけ、車を作っている。教師もタイヤの部分などを援助している。ままごとコーナーで見ていたM男は、積み木を持ってきて、「道路作る！」と道路を作りだした。近くにいたT男も「道路作ろう！」と誘い、２人で道路を作り出した。A男、B子、C男は、車ができあがると、それぞれM男たちが作っている積み木の道路の上で車を走らせ始めた。

② M男は「バーベキューしに行けるよ」と積み木をつなげながら、道路を作っていく。教師がM男に向かって「高速道路？」と聞く。M男は「うん」とうなずく。教師は、紙を丸めて棒を作り、黄色いガムテープをシマシマとなるように巻き、その棒を積木の道路の上で、斜めに上げ下げしていく。それを見たM男が「ETCだ！」と、言って喜びながら近づき、教師が棒を道路の上に置くと、M男はその棒を持ち積木の上で上げ下げし始める。そしてA男やB子の車が動いてくるのを待ちかまえ、B子の車が近づくと「どうぞ」と言って笑って棒を上げ、車を通したり、ETCの棒の箇所を移動させて、違う場所で、「通れますよ」と棒を上げて車を通したりした。

③　B子たちの車が通ったのを見てから、M男は、また積木置き場から長方形・薄型の積み木を運んできて、道路をさらに長くつなげ作っていく。そしてM男は、「ここは橋だよ。車も渡れるよ」「遠くまで行けますよー」とどんどん道路を長くつなげて作っていく。T男もゆっくり積木を運びながら道路をつなげていった。高速道路は、保育室の端近くになると曲がり、窓の近くになると曲げて、しだいに12メートルくらいの長さになっていった。車を道路に走らせ遊ぶ友達の様子を、しばらく見ていたY男も車を作り、道路で走らせ始める。




〈幼児の表現の育ちの観点からの分析・考察〉

①　M男は、友達や教師が作っていた車から、道路を想像し、道路を作りたい、という気持ちを表現していったと思われる。

②　M男は、教師が作ったETCの棒に興味をもち、より意欲的に高速道路を長く作っていこうとしていた。教師がETCの棒を道路に置くと、すぐに棒を持って、上げ下げする動きをし始めたが、やってみたかったのだと思われる。友達の車が近づくと「どうぞ」と言ってETCの棒を上げ、友達の車の進む様子を見ながら、ETCの棒の上げ下げの動きを楽しんでいた。また車を作って走らせている幼児たちも、ETCの部分を通過することの楽しさを感じて車を走らせていたと思われる。

③　M男は、高速道路の積木をつなげたり、板を渡したりして橋なども作り、それを言葉で友達にも伝えるなど、高速道路作りを楽しみながら表現して遊んでいたと思われる。

〈幼児の表現の中に見られた社会認識の観点からの分析・考察〉

②　M男は、高速道路を理解しており、高速道路にETCがあることなどについても認識していた。教師の作った黄色いシマシマの棒をETCの棒としてイメージし、車が近づくと下がっていたETCの棒が上に上がるということも認識しており、自分でも表現して行っていた。

③　M男は、高速道路を車に乗り走った経験から、高速道路には、川を渡る橋のようになっている所などもあることを認識しており、道路を橋のイメージでつなげ、そこから見えるであろう景色を想像し、言葉にも出しながら道路を作っていたと思われる。

〈環境・教師の援助〉

①　環境として、牛乳パックの車に興味をもった幼児が、車を作っていけるように、車を作る材料、素材について、教師は提示し、幼児ができないような部分の援助をしていた。

②　教師の援助として、M男が積み木で車を作り始めた時に、M男の道路のイメージが高速道路であることを確認した上で、ETCの棒を作って、棒を上げ下げして見せていた。M男は教師が作ったETCの棒や教師の動きに興味をもち、高速道路作りの意欲が高まっていったと思われる。またM男の高速道路のイメージも広がり、自分の見た景色なども思い出して表現するきっかけとなっていったと思われる。

**事例3**　「アイスクリームやさんへの興味を深め、役割を理解して模倣しながら友達と売り買いを楽しんで遊んだ事例」

◆　7月13日（金）　晴れ　9：10～10：15　　―保育室―
〈アイスクリームやさんごっこ〉

①　M男とL子は、アイスクリームやさんのマーク（サーティワン）がついているヘヤーバンドをかぶり、長方体の積木の板を運んでカウンターのようにして、「ここに、アイスクリームを置こうか？」「レジは、ここでいいよね？」と互いに聞きながらアイスクリームやさんの場所を作っていった。店の後ろの方は段ボールで囲っていく。

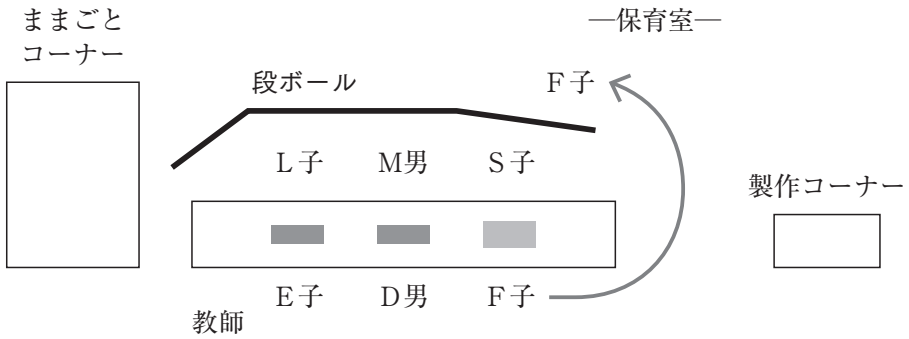
②　M男が近くで見ていたS子を遊びに誘うと、S子も遊びに加わったので、M男はS子に何の仕事をしたいか聞きながら、アイスをのせる器具が足りないことから、レジの役もできることを伝えていった

③　S子が「アイスクリームは、いかが？」と言い始めるが、M男は、「まだオープンしていませんよ」と言って3人でコーンにアイスをのせて作っていく。しばらくしてM男が「1時間たちました。」「いらっしゃいませ！アイスクリーム、いかが？」と客の幼児に声をかけ、メニューを見せながら注文を聞き、アイスを売っていった。E子、F子、D男たちも嬉しそうにアイスを選んで買っていた。

④　しばらくして、F子がカウンターから少し離れた場所へ動き、そこで電話を持ったふりをして「もしもし、すみません、アイスください」と注文する。M男はF子の方を見ながら、「はい、お届けですね」と注文を聞いていった。近くにいた教師は「へーお届けもするのねー」と驚いたように言う

と、F子は「ママ、よく頼むよ」と教師に向かって言った。

⑤　教師が「アイスクリームください」とM男に声をかけ、アイスクリームの種類の名前を言うが、M男は首をかしげ「ありません」と言う。教師は「えー！これです」とメニューの写真を指差すと、M男は「これですか？ちょっとお待ちください」 と言って用意していくが、教師の方を見て近づき「あの、待つところもありますよ」と言いながら椅子を出し「ちょっと、お待ちください」と言って、積木をテーブルにして教師の前に置く。教師は、「待つところもあるのですね」と言って、アイスクリームができるのを待っていた。




〈幼児の表現の育ちの観点からの分析・考察〉

①　M男とL子は、アイスクリームやさんのマークがついたヘアーバンドをかぶっていることで、アイスクリームやさんのつもりをもって、互いの考えを言葉や動きで伝え合いながら、店の場所を作ることを楽しんでいた。

③　M男、L子、S子の３人それぞれが、コーンにアイスをのせ、アイスクリームを作ることを楽しんでいた。他の幼児もアイスを買うことを楽しんでいた。

④　F子は、家からアイスをお届けで頼むことを、電話を使って話しているつもりで表現することを楽しんでいた。M男も電話での注文であることを察し、注文を受け、応じていたが、電話で話しているつもりで、互いに伝え合う楽しさを表現して遊んでいたと思われる。

⑤　M男は、教師が注文したアイスの種類が始めはわからなかったが、教師にメニューのアイスの絵を示してもらってどのようなアイスか理解したので、作る意欲をもって取り組んだ。しかし教師を待たせるということを考え、座って待つ場所を用意したり、店員としての言葉を使って表現したりしながら、客である教師を思いやる姿を示していた。

〈幼児の表現の中に見られた社会認識の観点からの分析・考察〉

①　M男とL子は、アイスクリームや「サーティワン」のお店へ行った経験から、実際のお店のつくりや配置を大まかに覚えていたようで、カウンターなども再現

しようとしながら、声を掛け合い、物を置く場所については、友達の思いも確認しながら作ろうとしていた。

② M男は、遊びに加わってきたS子に、店における仕事について話し、S子が仕事を選べるようにも言葉をかけていたが、店の中では、アイスを作る人と売る人、レジをする人などの仕事があるということについては認識して、伝えていたと思われる。

③ M男とL子は、店の中でのアイスクリーの作り方も認識しており、アイスディッシャーを使ってのせるなども理解して、表現していた。また客が来た時や、客からアイスクリームの注文を聞く際の、店員の言葉「いらっしゃいませ！」「何にしますか？」「メニューをどうぞ」なども認識しており、客役の友達に対応していた。

④ F子とM男は、客が電話で注文をする場合と、注文を受ける店員としての言葉などを認識しており、客と店員のつもりになって表現していたと思われる。またF子は、家庭において母親が電話で何かを注文している言葉を聞いて電話での注文について認識していたと思われる。

⑤ M男は、教師の注文を受けたが、アイスを作る間に待っている教師のことを考え、待つ場所を作るなど、店員としての客を意識した動きと言葉を表現していたが、模倣というより、自分で考えて動いている姿のようでもあった。

〈環境・教師の援助の観点からの分析・考察〉

① 教師は、数名の幼児がアイスクリームやさんに興味をもっていることをとらえ、その店のマークをコピーした紙や、アイスディッシャー、店の実際のメニューなども使えるように籠に入れて保育室に置いていた。それらは、アイスクリームやさんをやりたいという幼児の表現意欲を高めたと思われる。

⑤ 教師は、アイスクリームやさんの遊びの様子を見ながら、客としてかかわり、アイスを注文する時には、メニューにあったがM男がまだ知らない種類を注文し、気づかせていた。そのことにより、M男の認識できるアイスの種類が広がったと思われる。

**事例 4**　「夏休みの体験を再現し、生活経験を広げながら、遊びを楽しんでいた事例」

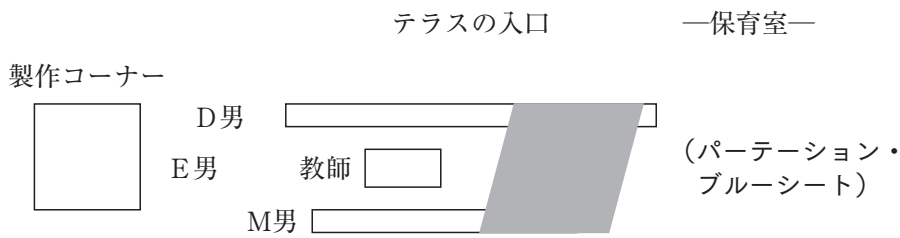
| |
|---|
| ◆ 9月6日（木）　晴れ　9：00～10：10　　―保育室―<br>〈バーベキューやさんごっこ〉 |
| ① M男が、教師に「キャンプで見たテントを作りたい」と要求してきたので、教師は、M男のイメージを聞きながら、パーテーションを持ってきて、上にブルーシートをかぶせた。M男は、嬉しそうに「うん」とうなずき、その下の場所の、積み木を運んできて、80cmくらいの横長の肉を焼く台を作り、ままごとコーナーから魚焼きの網と、丸くて茶色いフェルトのかたまり |

を何枚か持って来て、積み木の台の上に網を置き、網の上に一枚ずつフェルトの肉を並べていった。

② M男は、椅子を運び、テーブルとイスを並べて、食べる場所を作っていった。ステンレスの網の上に並べた茶色の丸いフェルトをゆっくりと１枚ずつ裏返していく。（途中肉が１枚なくなるが、教師と一緒に探し、みつける）

③ M男は、肉を焼きながら、近くに誰かが通ると、「いらっしゃいませ！」と声をかけていく。近くの製作コーナーにいたD男とE男が客として、食べに来たので、料理を出していく。

④ 教師も「すみません。」と言いながら客として食べに来る。M男は、はりきって「いらっしゃいませ！」「何がよいですか？」「肉、焼けていますよー」と言いながら、保育者の前にお皿にもった料理や、コップなどを並べていく。保育者は椅子にすわり、テーブルに並んだ料理を食べる真似をしながら、「おいしいですね」とM男に向かって応えていく。M男も嬉しそうに笑う。




〈幼児の表現の育ちの観点からの分析・考察〉

① M男が夏休みに体験した、テントをはってのバーベキューというイメージを再現したくて、教師にそのイメージを伝えていったことにより、教師がパーテーションや、ブルーシートを出して取り付けてくれたので、とても喜び、さらに食べる場所などについて、積木や椅子を運び、意欲的に場所を表現していったと思われる。

② M男は、バーベキューにおける、大きな肉焼きの鉄板で肉を焼いている店の人の動きを見た経験から、積木で焼き肉台を作ることやステンレスの網焼きの上で肉を焼くという表現を楽しんでいたのだと思われる。

③ 店の準備ができると、店の近くを通る友達に、積極的に声をかけていた、自分の遊びを伝えたいという思いだったと思われる。D男とE男も、M男の声かけに興味を持って店に来て、食べる真似を表現して遊んでいたが、楽しさを共感していたと思われる。

④ 教師がお客様さんとして店に来てくれたが、注文を聞く・肉などの料理をてきぱきと出すなど、はりきって店員としての言葉や動きの表現を楽しんで遊んでいたと思われる。

〈幼児の表現の中に見られた社会認識の観点からの分析・考察〉

① M男は、夏休みに体験したテントをはってのバーベキューの方法を認識しており、再現したいとの思いから、教師にそのイメージを伝えていったと思われる。

② M男は、バーベキューにおける、大きな焼き肉用の鉄板やその上で肉を焼いているお店の人の動きを見たことから、それらを認識し、積み木で肉を焼く台を作っていったり、ステンレスの網焼きの上で肉を１枚ずつ裏返して焼いたりするという方法について認識しており、表現していたと思われる。肉（フェルト）の片面は赤色で、片面は茶色になっており、赤面から茶色面へと裏返すことを楽しんでいたが、赤い肉が焼けて茶色になることを認識していたと思われる。

③ バーベキューの店の中のテーブルには、皿やコップ、フォークなどの食器や料理などを整えてきれいに並べていた。客を迎える準備において食器を並べることなどについて、大まかだがほぼ認識しており、それを表現していたと思われる。

〈環境と教師の援助の観点からの分析・考察〉

① M男は、夏休みに経験したテントをはってのバーベキューを再現したいとの思いで、教師にテントのイメージを伝えながら、それらしくなる物を要求していったが、教師がパーテーションやブルーシートなどの物を提示してくれたことで喜び、肉を焼く場所作りへの意欲を高めていったと思われる。

④ M男は、教師が客として店に来てくれたことを喜び、焼いた肉を食べてもらえるように、はりきって店員としての言葉を言ったり、料理を出したりするなど、表現意欲が高まっていったと思われる。

**事例５**　「興味をもった仕事の模倣をして遊びながら、仕事の意味などの理解を深めた事例」

◆ ９月20日（木）　晴れ　９：00～10：15　　保育室～年長・年少保育室
〈宅急便やさんごっこ〉

（前日からM男とY男の宅急便やさんの遊びが始まっていたが、年長組に箱だけを届けていたことから、保育者は箱の中にどのようなものが入っているのか、誰から注文された物を届けるのかなど、考えさせた。）

① M男とY男は、宅急便会社のマーク（クロネコ）の紙をヘヤーバンドにつけてかぶり、２人で長方形の積木を積木置き場から運んで来て、保育室の中央の場所に立てて置いた。M男が「たっきゅうびん」の文字が書いてある紙を積木に貼り、Y男と顔を見合わせて「ここで、いいね」と言う。それぞれ片手に小さな空き箱で作った携帯電話を持ち、「行こう！」と言って、隣の５歳児の保育室へ向かった。

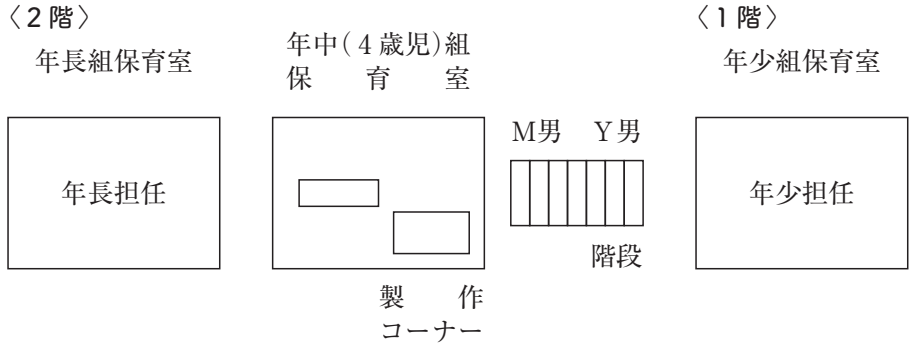
② M男とY男は、５歳児の保育室へ行き、Y男が中に入り、５歳児の担任に、「宅急便です。何かお届けはありますか？」と聞いたが、注文はなかったので、２人で保育室から廊下へと出て行った。その後ろ姿を見ながら、５

歳児が「昨日の宅急便からの箱、空っぽだったんだよなー」と言って、保育室に戻っていった。

③　M男とY男は、３歳児の保育室に向かい、今度はM男が、３歳児の担任のところへ行って「宅急便です、何かお届けはありますか？」と聞いた。そして３歳児の担任から注文を受けた後、「はい、わかりました、電話ですね」と返事をして、M男は嬉しそうに廊下に出ていく。

④　M男は、Y男に向かって携帯電話の箱を耳にあてながら「電話だって」と伝え、Y男と一緒に自分たちの保育室へ戻り、製作コーナーへ行き、空き箱を使って電話を作り上げる。できた電話を大事そうに持って走って行き、３歳児の担任に「どうぞ」と言って渡す。

⑤　その後、M男とY男は、１階と２階の階段のところで少し離れながら、空き箱の携帯電話を耳に当て、M男「うん、何時頃お届けですかね？」Y男「うん、３時頃ですね」M男「わかりました」と二人で話しながら、数メートル離れた場所で互いに顔を見合ったり、うなずいて笑ったりしながら話していた。




〈幼児の表現の育ちの観点からの分析・考察〉

①　M男とY男は、宅急便のマークのついたヘヤーバンドをかぶり、携帯電話をもって動くということで、宅急便の配達員のつもりになって、楽しそうに動き、表現して遊んでいた。また看板を何所へ置こうかなど、互いに考えを伝え合って遊びを進めることを楽しんでいたと思われる。

②　前日の遊びの中で、宅急便やさんは注文したものを届けるということに気づいたM男とY男は、年長組の担任・年少組の担任に注文を聞きに行くなど、自分たちの考えたことを行動で表現していた。他の学年の教師にも自分たちの思いを表現している姿、かかわりを広げている姿などがとらえられた。

③④　年少組の担任から注文を受けたことを喜び、M男はやる気をもって電話を作り、できあがると嬉しそうに年少組の担任のところへ届けに行くなど、楽しさを表現して遊んでいたと思われる。

⑤　M男とY男は、携帯電話を使って、少し離れた所で、品物を何時頃に届けるの

がよいかなどの連絡をとっていたが、配達員になったつもりで、電話での伝え合いを楽しんで表現していたと思われる。

〈幼児の表現の中に見られた社会認識の観点からの分析・考察〉

①　M男とY男は、「たっきゅうびん」という文字の書いてある看板を保育室の中央の目立つところに立てていたが、看板は、他の友達の見える位置に置く必要を認識していたようである。また宅急便の配達員は、マークのついた帽子をかぶり、携帯電話を使って仲間と連絡を取り合いながら品物を届けるという仕事の内容を認識していたと思われる。

②③④　M男とY男は、年長・年少組の担任に、宅急便の配達員として届ける物についての注文を、言葉できちんと聞いていたことから、昨日の遊びにおいて「宅急便やさんは、箱だけを届けるのではなく、注文を受けたものを届ける」ということの理解を深めて遊んでいたと思われる。M男は、宅急便の会社が品物を作るという考えで、それを表現し楽しんでいた。しかし宅急便本来の仕事内容については、まだ理解してはいない。

〈環境・教師の援助の観点からの分析・考察〉

①　M男たちが宅急便の配達員に興味をもっていたことから、教師は、宅急便のマークの紙を印刷し、籠に入れておいたが、M男たちは、そのマークを自分たちでヘヤーバンドにつけて動くことで、より配達員としての意識が高まり、遊びへの興味も続いていたのだと思われる。

②　教師が前日の遊びの様子から、M男たちに、宅急便の配達員が届ける箱には注文した物が入っていることに気付かせたことで、M男たちは、注文を聞きに行ったり、注文を受けた物を作って届けるということの認識を深め、動きや言葉を変えていったと考えられる。

### ⑷　５つの事例のごっこ遊びにおける幼児の表現する姿からとらえた「社会認識」についての分析

６月から９月の期間における５つの事例では、ごっこ遊びの中で、「表現」ということにおいて、一人一人の幼児が、それぞれなりたいもの・役になって、それらを言葉や動きで表現しながら遊ぶ姿がとらえられた。そして、遊びの中で、幼児が表現する姿から、幼児の「社会認識」について、その内容を、さらに次の４つの視点から分析していった。

- 家庭や仕事における役、役割などの視点
- 役を意識した言葉、ことば使いなどの視点
- 仕事の内容、役割についての視点
- 物の意味・使い方、仕組みなどについての視点、

である。「社会認識」について分析した内容を、次のページに一覧にして示すことにする。

○５つの事例のごっこ遊びにおける幼児の社会認識の内容・分析

| | | 〈事例１〉<br>おうちごっこ・車作り | 〈事例２〉<br>車で遊ぶ<br>高速道路作り | 〈事例３〉<br>アイスクリームやさん | 〈事例４〉<br>バーベキューの店 | 〈事例５〉<br>宅急便やさん |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 社会的機能の部分的な認識・水準Ⅱ・Ⅲ | 役 | • 家族の一員（父･兄･ネコ） | • 道路のETCを操作する人 | • アイスクリーム店の店員 | • バーベキュー店の店員 | • 宅急便の会社の人 |
| | 言葉 | • 出かける時、帰ってきた時の挨拶<br>• ネコへの言葉かけ<br>• 家族の全員への声かけ | • ETCの動きに関して、車が通れるかどうかの声かけ<br>• 車を走らせようとしている友達に道路の様子の声かけ | • 客への声かけ、挨拶<br>• 客に注文を聞く言葉<br>• 客に待ってもらう言葉<br>• 電話での注文と受ける言葉 | • 客への声かけ・挨拶<br>• 注文を聞く言葉<br>• 肉の焼き具合の説明の言葉<br>• 肉や料理を出す時の言葉 | • 客への挨拶、言葉がけ、注文を聞く言言葉<br>• 品物を届ける時の言葉<br>• 時間を確認する言葉 |
| | 仕事の内容・役割 | • 髪を整える<br>• 料理を作る<br>• 学校へ行く<br>• ネコの餌を作り、ネコに与える<br>• 車に乗る<br>• 運転する<br>• おやつを買ってくる | （製作した車を走らせることができる高速道路を作ってあげたい）<br>• 高速道路の数か所で､ETCを動かす | • 客に声をかける<br>• 挨拶をする<br>• メニューを見せる<br>• 注文を聞く<br>• 注文された物を作る<br>• アイスクリームを売る | • テントの中でバーベキューを用意する<br>• 客に、注文を聞く<br>• 皿や食器を並べる<br>• 肉を焼く<br>• 料理を出す | • 宅急便やさんとして品物を届ける<br>• 品物を届けて良い時間を聞く<br>• 宅急便の人同士で連絡をとる |
| | 物の意味・使い方・仕組み | • おしゃれ（ブラシで髪を整える）<br>• ネコは、靴を履いていない<br>• 車の内部の作り<br>• ハンドルがある位置 | • 高速道路<br>• 高速道路にETCがある<br>• ETCの動き<br>• 高速道路が通っているところや道路から見える景色（川の上・橋など） | • 店のマーク<br>• カウンター<br>• レジがある<br>• メニュー<br>• アイスクリームディシャーの使い方<br>• アイスの種類<br>• 注文があった物を配達する | • テント<br>• 肉を焼くコンロ<br>• 肉の焼き網<br>• 肉の焼き方<br>• 椅子、テーブルの設置<br>• 食器や料理の並べ方 | • 宅急便やさんのマーク・看板（設置）<br>• 宅急便やさんの仕事<br>• 携帯電話の使い方・扱い方<br>• 届ける箱の中には、品物が入っていること |

## 5　まとめと今後の課題

本研究の目的は、幼稚園生活における幼児の表現に関する育ちの中で、幼児の社会認識の芽生えについて明らかにすることであるが、各時期のごっこ遊びにおける事例の分析・考察を深める中で、幼児の「表現」における育ち、「社会認識」に関する育ちについて、次の内容が明らかになった。

○幼稚園生活における幼児の「表現」の育ちについて

- ごっこ遊びの中では、幼児が自分のやりたいことを表現している姿や、身の回りの生活や社会の中で見たこと、経験したことをもとに表現している姿、大人の様子や出来事などを模倣して表現する姿などがとらえられた。そのような姿から、自分からやってみよう、表現してみようという意欲や、時期を経て、遊び方の変容とともに、表現方法の広がりがとらえられた。また幼児が自分の役割などを意識し、表現して遊ぶ姿の中に、イメージを広げながら遊びを進めている姿や、遊びの中での気づきから表現方法を変化させていく姿など、表現の育ちがとらえられた。
- 遊びの中で、幼児が自分の思いを友達や教師と伝え合う姿や、幼児が周囲の友達や教師などの相手を意識し、どのように言葉や動きで表現したらよいのか、ということを考えながら表現している姿などもとらえられた。また人とのかかわり（友達・他学年の教師）の広がりにおける育ちの変化もとらえられた。これらは、遊びの中において、人とのかかわりを意識した表現・社会性の育ちにつながっていると考えられる。

○表現における幼児の「社会認識」における芽生えについて

- それぞれの遊びの中で、幼児が家庭における生活や社会の中で認識したことを基に、場や物を作ったり、遊びの中に取り入れ、表現したりして遊ぶ姿が見られた。その中で、物や物事の仕組み、店のつくりや配置などを始め、店における仕事の手順なども部分的に理解し、表現しながら楽しむ姿がとらえられた。これらは社会認識の芽生えの姿であると考える。
- また幼児が見たことや体験したことを模倣して表現している段階から、遊びを進めているうちに、自分で物事や人の役割・言葉などを考え表現したり、知らなかったことに気付いて、理解し行動を変えていくなど、物事への認識や社会認識を深めている姿もとらえられた。
- ごっこ遊びの中で、幼児が、自主的・主体的に物や人とかかわり、場や遊びに使う物や必要な物を作ったりして遊びを進めながら、身の回りの生活や社会において認識したことを表現し、体験しながら認識を深めていた。このような姿は、遊びへの取り組みを通しての幼児の主体的・対話的な学びの姿の一つであると考える。

○ごっこ遊びにおける環境・教師の援助について

〈環境〉

- 毎日の生活、一日の生活の流れの中で、幼児が自由にやりたいことをして遊ぶことができる時間が保証されている、という保育の流れ、環境であったことから、幼児が自分の思いを表現し、実現しながら遊ぶことができていたのだと考える。
- 空間や時間を始め、空き箱などの廃材や材料・用具などが、予想される活動に合わせて保育室の製作コーナーに適度な量置いてあり、積木なども含め、

それらが自由に使えるようになっている環境であったので、幼児が自分の考えやイメージを、自主的に表現していくことができたのだと考える。また、そのような中で、同じ興味をもった友達と、ごっこ遊びを自主的に展開していけたのだと考える。

- また教師が用意した、実際のブラシやステンレス製の焼き網、アイスディッシャー、アイスクリームや宅急便やさんのマーク（ヘヤーバンドにつけられるようになっている）なども、幼児が興味のあるものについての意識や憧れの思いを高め、それらを使って表現してみたいという意欲につながっていったと考える。

〈教師の援助〉

- 教師の援助では、幼児の思いやイメージしていることなどをとらえながらの素材や用具などの提示や、言葉がけ・働きかけなどのかかわりをしていた。また幼児が自分で経験したことを思い出し、気付いたことを表現していくきっかけとなるような物（ETC の棒）の提示や、店などの遊びでは、幼児が作ったものを喜んで受け止め、客となって注文していくなどの働きかけをしていた。これらのかかわりは、幼児の遊びにおける表現意欲を高め、幼児のもっている考えやイメージを引き出すことにつながっていったと思われる。また、アイスやさんや宅急便やさんの遊びでは、幼児がまだ認識できていないことに気付かせるなどして、幼児の物事への認識を広げていたと考える。

○ごっこ遊びの中で、幼児の表現意欲が高まり、表現方法が広がっていく姿や、社会認識についても少しずつ深めている姿がとらえられたが、これら幼児の「表現」と「社会認識」における育ちの背景として、幼稚園教育の基本である「環境を通して行う教育」の実践が支えとなっていたと考えられる。

○本研究では、幼稚園で生活する４歳児クラスの保育観察の記録から、幼児の表現の育ちと社会認識について明らかにしていった。今後の課題としては、５歳児クラスにおける遊びの中での幼児の表現・社会認識の育ちについて明らかにしていきたい。

## 参考・引用文献

文部科学省（2018）『幼稚園教育要領解説』フレーベル館
岸井勇雄・無藤隆・柴崎正行監修・榎沢良彦編著（2009）『保育内容・表現』同文書院
平田智久・小林紀子・砂上史子編（2015）『保育内容「表現」』ミネルヴァ書房　P.8、43
大場牧夫（2009）『表現言論』萌文書院
平田オリザ（2006）「表現教育はなぜ必要か」『日本労働研究雑誌』
日下正一・須々木百合子・青木倫子・風間節子・小林孝子・坂口やちよ（1991）「幼児期の子どもにおける社会認識とその発達」『福島大学教育学部論集50号』p.29

東京都文京区立小日向台町幼稚園研究発表冊子（1976）『幼児のごっこへの取り組み方の実態と指導法』東京都文京区教育委員会
社会認識教育学会（2006）『社会認識教育の構造改革―ニューパースペクティブにもとづく授業開発』明治図書